



山での“愛車”であるトラクタで伐倒した木を運ぶ小林さん

農業用トラクタで山仕事 県間伐コンクールで森林協会長賞受賞

森

林所有者及び林業事業者の間伐技術の向上と林業経営の意欲を高めるため、模範となる間伐や集約化・低コスト作業システムによる収益性の高い間伐を顕彰して広く波及することを目的に実施されている山形県間伐コンクール。その平成28年度の表彰式が1月26日に山形市で開催され、町内の山で間伐を行っている小林幸一さん（荒砥乙）が、間伐技術部門において山形県森林協会長賞を受賞しました。

Interview

第一は、山がきれいになること。間伐等で山の手入れはしなければなりません。間伐で出る木の質は低く、製材としては使えません。しかし、切り捨て間伐であれば切った木は山に放置されているところですが、木の駅が受け皿となり、モリ券がもらえます。本当の意味で「山がきれい」になり、少なくとも収入があ

るから励みになっています。今回の自分の間伐の取組みが町内に波及し、よりよい森林づくりにつながればうれしいです。今後、白鷹町の山を元気にする仲間が増えることを望んでいます。



小林 幸一さん（荒砥乙）

山がきれいになるのが一番
みんなで山を元気にしたい

一昨年（平成27年）の3月に定年を迎え、そこから本格的に山の手入れをスタートさせた小林さん。林内作業車を所有しない小林さんは、家にあつた農業用トラクタで集材するという工夫をしており、効率性の高いその独自の手法が評価され、今回の受賞となりました。

なお、表彰は間伐技術部門と集約化間伐部門の2部門あり、計6件の受賞者の内、森林所有者個人で受賞したのは小林さんのみでした。

山の手入れ、始めませんか。

—しらたか木の駅の取組み—

平成26年度にスタートした「しらたか木の駅」。間伐等で出た木材を、1立方メートルあたり4千円のモリ券（※）と交換します。

「この取組みを始めて、山に目を向ける個人や団体が増えつつあります」。

そう話すのは、しらたか木の駅実行委員長の小林真さん（横田尻）。木の駅がスタートした26年度の集積量は約100立方メートルでしたが、平成28年度は6.5倍の約650立方メートルまで増加しました。それに伴い、モリ券の町内商店の利用も増え、経済的効果も



発足当初のしらたか木の駅。来年度で4年目を迎える

出始めています。

小林さんは今後の目標について、「効率を追求しすぎず、ゆっくり着実に行っていきたい。その中で、徐々に本気の出荷者を数人増やしていきたいと考えています。しらたか木の駅は里山に目を向けるきっかけづくり、多様な人たちが森づくりに参加できる活動をしていきたいです」と話します。

森林所有者の皆さん、しらたかの山をきれいに、元気にするために、今から山の手入れを始めませんか。

※モリ券…現金の代わりに出荷者に支払われる町内通貨